ワカモノヂカラプロジェクト活動報告（2011 年 10 月末現在）

事業目的

被災地から遠く離れた関西近隣の学生にあっては、ボランティア活動を行うための手段が非常に少ないのが現状である。

一方で、高校・大学生などの若者は体力があり、「被災地のために何か支援したい」という気持ちが高まったまま、どうしていいのか迷っている状況にある。

そこで、本事業では、関西からボランティアバスを派遣し被災地での直接的な支援を実施する。また、自らができる支援の方法を考え実施していくことによって、青少年の社会貢献意識の向上とともに、ボランティア体験から学んだことを地域課題の解決に結びつけることができる仕組みづくりを目指していく。

ワカモノヂカラプログラム

プログラムは下記３部から構成されます。

① ワカモノシタクバ：グループワークを中心に「被災地のボランティアについて」「被災者とのかかわり方について」等の研修を事前に実施します。

② ワカモノサギョウバ：現地ニーズに合わせて、被災した施設や家屋等の泥かき、がれきの撤去、清掃などのボランティアを実施します。

③ ワカモノシャベリバ：専門講師による研修及びふりかえりや活動後における関西発信の活動について語る場を設けます。

スケジュール

申込前説明会（全 4 回）

7 月 3 日（日）
7 月 16 日（土）
7 月 31 日（日）
8 月 2 日（火）

ワカモノシタクバ（事前研修会）（全 9 回）

7 月 18 日（祝）
7 月 24 日（日）
8 月 5 日（金）
8 月 6 日（土）
8 月 9 日（火）
8 月 29 日（月）
9 月 2 日（金）
9 月 8 日（木）
9 月 10 日（土）

ワカモノサギョウバ（被災地での支援活動）（5 期 6 便）

第 1 期　7 月 25 日（月）～28 日（木）3 泊 4 日（うち車中 2 泊）
第 2 期　8 月 7 日（日）～10 日（水）3 泊 4 日（うち車中 2 泊）
第 3 期　8 月 9 日（火）～13 日（土）4 泊 5 日（うち車中 2 泊）
第 4 期　8 月 15 日（月）～19 日（金）4 泊 5 日（うち車中 2 泊）
第 5 期（2 便）　9 月 12 日（月）～16 日（木）4 泊 5 日（うち車中 2 泊）

ワカモノシャベリバ（事後研修）（全 2 回）

8 月 28 日（日）～29 日（月）1 泊 2 日
9 月 23 日（祝）～24 日（土）1 泊 2 日

ワカモノミーティング（関西発信の支援事業企画会議）

月に 2 回実施中

活動報告

ワカモノシタクバ　－不安の解消と仲間との出会い－

被災地でのボランティア活動に向けて、現地での注意事項やボランティア活動に対する心構えなどの研修を実施。また、事前にお互いの顔合わせを行うことで参加者の不安を和らげる機会とした。

当日の持ち物などの説明と共に、被災されている方々とのコミュニケーションのとり方なども参加者と共に考えることができた。

ボランティア活動を行う我々にとっては「被災地」でも、そこで暮らしておられる方にとっては、「かけがえのない故郷」であること「これから生活をしていく場所」であることをスライドショーなどを通して伝えた。興味本位で参加を考えていた学生たちの心境が変化した瞬間を見ることができた。

ワカモノサギョウバ　－被災地でしか感じられない感覚と気づいたこと－

片道 1000km、15 時間を超えるバス車内はワカモノシタクバに続いて行う研修の時間となった。ワカモノシタクバとして事前に顔を合わせている仲間もいるが、初めて顔を合わせる参加者もいることから、お互いを知るということで自己紹介をはじめ、この事業に参加したきっかけなどを話してもらった。高校生と大学生の同世代の若者たちが、ボランティアについて真剣に考え話し合う貴重な時間となった。

石巻市福地地区にある横川公民館を宿泊場所としてお借りし、40 名を超える若者が集団生活を行った。岩手県での宿泊は盛岡市社会福祉協議会が運営する支援ボランティアの宿泊施設であるかわいキャンプをお借りした。寝袋で寝る体験が初めての参加者がほとんどで、未だに続く余震に怯えながら布団を寄せ合い雑魚寝状態での宿泊となった。

被災地で活動をされている RQ 市民災害救済センターや盛岡市社会福祉協議会のコーディネートを受け被災地での活動を行った。参加人数は 5 期 6 便でのべ 220 名を超える。

実際に行った活動は以下の通りである。

○　**株式会社木の屋石巻水産での缶詰救出洗浄作業**

木の屋石巻水産の沿岸部にある倉庫に出荷を控えていた缶詰数十万個が津波の被害を受けた。ラベルが貼られ箱に詰められていたとは想像もつかない缶詰が、体育館くらいの広さはある倉庫一面泥にまみれて積み上げられている。我々は泥の中からかろうじて被害を逃れ、商品価値のある缶詰を救出し洗浄する活動を行った。

上下長袖長ズボンに合羽をまとい、マスク、ヘルメット、ゴーグルといったもので全身を保護し、真夏の暑い中、泥まみれで汗だくの中の活動となった。また、衛生的にもあまりよくない状況で、鼻を突く匂いとハエの量は今までに経験したことがない状況だった。

期を重ねる毎に、泥の中からの缶詰を救出する作業から、救出された缶詰を洗浄する作業へと活動内容も変化していった。

活動中は、他のボランティア団体の方や社員の方などと会話をとる時間もあり、震災時の状況やその後のボランティア活動の様子などの話を聞くことができた。

○　**思い出の品の洗浄作業**

福地地区の体育館に集められた思い出の品を洗浄する作業を行った。思い出の品には、記念写真、鞄、ランドセル、服、靴、学童用品、おもちゃ、遺影、位牌など様々なものがある。我々が洗浄した物は主に写真と子どもたちの学童用品だった。写真は水や泥に濡れてしまうとバクテリアが発生し、写真が消えてしまうとのこと。泥などの汚れを丁寧に布やブラシで除去したあと、スキャナでパソコンに取り込む作業を行った。学童用品の洗浄は、名前の書いてあるお道具箱や習字道具などの洗浄なども行った。

体育館近くには、大川小学校といい全校生徒の 7 割が津波により犠牲になった小学校がある。我々が綺麗に洗浄している物は、おそらく犠牲になった子どもたちの物、そんなことを考えると作業をしながらも涙があふれる思いだった。

作業を終えてからの話し合いの中では、いくら拭きとっても取れない泥汚れをどこまで綺麗に拭き取ったらいいのか、どんな心構えで活動をしたらいいのか、犠牲になった子どもたちのことやその親族のことなどを考える時間となった。

作業中には、思い出の品を引き取りに来られる方もあり、涙ながらにお礼を言われ帰っていく姿に救われた若者もいた。

また、被災された方々の顔や名前が見える活動であることから、他県からやってきた我々だからこそできる活動であったようにも思う。

○　被災家屋の瓦礫撤去

牡鹿半島にて行った瓦礫の撤去作業は、真夏の炎天下の中、怪我防止のため長袖長ズボンにヘルメットにマスク、長靴というフル装備での活動となった。とにかく暑いという印象だが、1日の活動で被災家屋一軒の家財道具の運び出しと瓦礫の撤去、庭や基礎部分に堆積した泥のかき出しを完了することができた。

休憩時には近隣の住民の人たちから、お茶やお菓子をいただき、活動のことやボランティア活動等についておしゃべりしながら楽しい時間を準備していただいた。

大変な疲労感ではあったけれど、達成感もある充実した活動となった。

○　仮設住宅のサロン活動

岩手県宮古市の仮設住宅にて住民に対するサロン活動を行った。一定規模の仮設住宅には、住民の共有スペースとして交流広場というのが設けられている。サロン活動のねらいは、住民同士の横のつながりやコミュニケーションを促進しようというものであり、ボランティアが在中している。サロンを訪れるのは子どもたちや高齢者の方々がほとんどで、人数は少数である。たくさんの人に利用してもらいたいのだが、なかなか思うように利用されていないのが現状である。

ボランティアとして活動した日も、午前中の来場者は数名程度と少し寂しい様子だった。チラシを持って個別に住居を訪問したりしたが、サロンの存在は知っていても、無関心や無関係な感じをもっておられる方が多かったように思う。活動は午後3時までで終了したが、それ以降に学校から帰ってきた子どもたちが遊びにやってくるようだった。

活動する人や時間が制限されている中ではあるが、被災されている方々のニーズにあわせ、かつコミュニティの形成や孤独死の防止などを考えた継続的な支援が必要になってくるのではなかいと思う。

実際に活動した学生たちも、一日だけの活動で終わってしまい、課題は見えるものの成果が見えない支援となり、悩む場面があった。

○　支援物資の仕分け作業

活動日当日が雨天のため急遽活動を変更して、支援物資の仕分け作業を行った。岩手県山田町にある高校の運動部が利用する室内練習場に届けられた支援物資を品目毎に仕分けをする作業をした。大きな室内練習場に詰め込まれた大量の支援物資に唖然となった。

仕分け作業は衣類が中心で、届けられたダンボールの箱から物資を出し、衣類や履物、生活雑貨などに仕分けを行う。震災から5ヶ月が経過し、被災者への支援物資はある程度行き渡っている状況だそうだ。今回の仕分け作業は、綺麗に仕分けを行い引取業者に販売するのが目的ということ。日本全国から届けられた支援物資と思うと、善意が無駄になってしまうのではないか、と思ってしまうのだが、販売することで現金化できるということである。お金に変えて、さらに必要とされる支援につないでいこうとする活動のボランティア活動をさせていただいた。

これまでに見たことのない量の支援物資を前にすると、震災直後の日本中が被災地のために動き出した膨大なエネルギーを感じることができた。

○　瓦礫撤去後の敷地内泥かき

震災から半年が経過した岩手県山田町において、被災家屋の泥かきを行った。我々の担当した家屋の敷地内は、一見すると既に作業が終了している様子だった。瓦礫は撤去され、残っているのは家屋の基礎部分だけだったからである。担当の方の説明では、ここにボランティアが入るのは2回目だそうで、前回の活動では、家財道具や瓦礫の撤去を行い、今回は基礎の上に堆積した海からやってきた泥をかき出す作業を行なって欲しいとのことだった。よく見ると 10cm 程掘り返すと元々の地面が見える。この家屋だけでなく、ここら辺り一帯に泥が堆積しているのである。

シャベルで表面 10cm の泥をすくい土嚢袋に詰めていく作業は、想像以上に大変なものとなった。30 人が午前 10 時から午後 4 時まで取りかかって、やっと一軒の家屋の泥をすくい取ることができた。積み上げたられた土嚢袋を見るとそれなりの達成感があったが、まだまだ他の家屋の泥を考えると、重機ではなく、人の手でないと進ま

ない作業があり、息の長い支援の必要性を感じた。

○　**菜の花プロジェクト**

岩手県大槌町に流れる大槌川の河川敷3km にわたって菜の花の種をまき、春に菜の花の花でいっぱいにしようというプロジェクトがある。種をまくのは子どもを中心とした地元の人たちで、我々はその種まきのために河川敷の瓦礫を撤去し、ゴミを拾い、雑草を除去するという活動を行った。

もちろん、春に咲く菜の花を想像しながらの、ただ何もないだだっ広い河川敷を掃除するだけの活動である。たくさんの人が菜の花を見に集まり、笑顔になってもらう、そんなおもいのもとに行った。

この日の活動は、午前 1 時間と午後 2 時間のわずか 3 時間だけであった。宿泊場所であるかわいキャンプから 2 時間バスに揺られて来て、3 時間だけではさすがに学生たちからは、「もっとやらせて欲しい」との声があがった。真夏の日陰もない河川敷での活動であり、そこを毎日ボランティアの指揮をされている担当の方を思うと、妥当な時間だったのかもしれない。そんな風に考えることができたのは、活動後の夜に行われるミーティングの中で今日の出来事をふりかえったからである。

○　**河川の清掃作業**

菜の花プロジェクトとは違う河川の清掃作業も行った。この川には貴重な生物が生息しているらしく、元の綺麗な川に戻すため、津波によって堆積した河底の泥をさらう作業を行った。9 月半ばの活動であったが水温が低いことと、胸まである長靴を履いていても水が侵入し、凍えるような冷たさの中での活動となった。川に入り泥をすくい土嚢袋に詰めるチームから、川の土手へ土嚢を運びあげるチーム、それを土嚢置き場まで運ぶチームまで、たくさんの人によって作業が進められた。

川底の泥ということもあり、どこまで綺麗になったのかを見ることが出来なかったが、積み上げられた土嚢袋を見るかぎりでは、大きな成果があったように思う。さらに、この活動で、一人では微力でも、たくさん人が集まれば大きな成果を生むこと、さらに、お互いを思いやり助けあうことで、仲間になり大きな力になることを実感した。

○　**ふりかえり**

活動を終え宿泊地へ帰ると就寝までの間に現地シャベリバとして、一日の活動のふりかえりを行う。その日の活動や活動を通して感じたことなどを深夜まで語り合った。また、ゲストとして被災地で長期間にわたり活動をされている方を招いたり、実際に被災された方を招いたりし、災害時の話を聞く機会なども設けることができた。さらに、これからの支援のあり方やボランティア活動のあり方、防災についてなどの話題についても語り合うことができた。これまで誰も経験をしたことがない未曽有の大災害に対して、学生が自分自身の事のように考え悩む時間となった。

ワカモノシャベリバ

ー関西からの元気を発信！ー

被災地での活動を終え関西に帰ってきてから数週間後に行われたワカモノシャベリバ。参加人数が思ったほどではなく、少し寂しい集いとなった。

防災教育の専門家として、兵庫県立大学防災教育センターの森永速男先生をお招きし「これからのワカモノに期待すること」と題して講演を行った。学生の頃だからこそできること、挑戦することの大切さ、仲間の大切さなどのお話をうかがった。

この講演を踏まえ、関西からできる、若者だからできることを深夜まで語りあった。

被災地の一日も早い復旧・復興が、このプロジェクトに参加したすべての若者の目指すべき未来である。このプロジェクトに参加したからこそできた仲間とともに、今後の関西からの活動が始まろうとしている。

このシャベリバにおいて立ち上がった企画が以下の 4 つある。それぞれの企画にチームができ、関西からの活動を継続していくことが重要である。それとともに、ワカモノヂカラプロジェクトに参加した若者だけでなく、関西からの支援活動の輪を周りの若者にも広めていきたい。

① 被災地への直接的な支援

震災直後に立ち上がった「あんだんて」を中心に、物品の販売を行いその利益を被災地へ届ける活動を行う。販売する物は、若者から集めた古着や古本をはじめ、手作りの雑貨等もある。

また、被災地において活動されている団体等からミサンガ等のアクセサリーを仕入れ、販売も予定している。

さらに、物品の販売を通して、被災地の状況や頑張っている方々の姿などを関西の人に伝える活動を行なっていく。

② 兵庫県内避難者への支援

福島県を中心に兵庫県に避難されている方が、約 400 世帯 1000 名を超えている。故郷の復旧・復興に心配を抱く中、慣れない兵庫県での暮らしを少しでも楽しくしてもらうためのイベントを実施する。現在考えているのは「神戸ウォークラリー」。避難されている方同士、避難されている方と兵庫県民、若者との交流をねらいとしている。

③ 東日本大震災を伝える活動

震災から月日が経つにつれて風化していく被災地の状況を、現地で実際に活動した若者が、被災地の状況や支援の必要性などを伝える活動が求められている。特に伝える相手を小学生や中学生とし、この震災を通して守っていかなければいけない家族や仲間、命の大切さなどを伝えていくことを企画中である。小中学生からすると年齢の近いお兄ちゃんやお姉ちゃんたちが伝えることにより、より身近に考えてもらえ、震災への備えやわが町のことを考えるきっかけとなることをねらいとしている。

④ 学生による復興支援プロジェクト

学生の企画による被災地支援を後押ししようとするチーム。震災のことが風化しているとはいえ、関西においても多くの団体や学生が被災地に対して支援を行なっている。その支援をさらに大きいものへとしていこうとするのがこのチームである。

ワカモノヂカラプロジェクトにも言えることなのだが、それぞれの団体が単体で活動していることが多く、お互いの活動も知らないし無関心なところがある。同じ方向を向いての活動であることから、情報共有をはじめ、それぞれの活動の横のつながりをつくることをねらいとしている。

ワカモノミーティング　―長期的な支援を―

被災地での活動だけが支援ではなく、関西から発信する支援を考え実行していくのがワカモノヂカラプロジェクトの特徴であると言える。被災地で活動した若者だからこそできる活動であり、またそのエネルギーを周りの若者へも伝えていかなければならないと考えている。ワカモノシャベリバ以降のミーティングでは、関西からできる支援の形を考えそれを実行していくために、月 2 回程度のミーティングを行なっている。高校生の参加や兵庫県外からの参加もあるため、ワカモノヂカラプロジェクトに参加したすべての若者が一同に介することは難しいが、それぞれのプロジェクト毎にもミーティングを進めている。

今年度は、我々が被災地で行った活動の報告を行う機会を設けること、また、関西の学生に広くワカモノヂカラプロジェクトを知ってもらえるように、学生を中心としたシンポジウムの開催を計画している。

おわりに

3 月 11 日の震災直後から、たくさんの学生から「募金をしたけど、他に何かできることはないだろうか。」などの話をよく聞いた。想像の範囲を超えた被害状況と、被災地が遠方であることなどの理由から、なかなか行動に移せない学生がほとんどだったと思う。

たくさんの若者からの声や、法人としての使命から始まったのがこのワカモノヂカラプロジェクトである。

若者たちには、バスに乗って被災地へ行く「きっかけ」を与えただけである。被災地での活動は、与えられたものだけでなく、自らが考え悩みながら、被災されている方々にとってよりよい支援を行おうとするものであった。また、高校生、大学生といった同世代の若者たちが集うことで、それぞれが刺激しあい成長していった点もこのプロジェクトでの成果であったと思う。さらに、このプロジェクトの最大の特徴なのが、継続した支援を行うことである。

我々の被災地での実際の活動日数は 20 日間、他にもたくさんのボランティアの方々が活動をされている。しかし、被災地の状況を見ると沿岸部には津波の爪痕が残り、被災されたかたは仮設住宅での生活が続き、復旧・復興にはまだまだといった状況である。今後さらに、被災地で活動するボランティアをはじめ、全国からの支援が必要である。

これから数十年にも及ぶ復興の中で、我々が支援したのはわずか 20 日間だけである。「被災地で活動を行った」という自信はついたかもしれないが、被災地の状況を考えると満足しているわけにはいかない。一方で、学生の中には、思ったように自分の力を出し切れず不完全燃焼なまま関西に帰ってきた者もいた。「もう一度被災地で活動したい」そんな声もたくさんの若者から聞いた。

ワカモノヂカラプロジェクトが始まる前に動き出した支援チームもあった。「チームあんだんて」である。あんだんては、周りの若者から古着や古本などをいただき、フリーマーケットなどで販売し、そこで得た収益を被災地へ届けようとするチームである。「あんだんて」という言葉は、音楽用語で【歩くようなスピードで】という意味であり、若者たち自身が考えたチーム名である。これから続く長い復興の道のりを、走ってしまうとすぐに息切れしてしまうので、歩くようなスピードで、ゆっくり長く続けていこうとする意志のあらわれである。あんだんてもワカモノヂカラプロジェクトとともに活動を継続している。

「歩くようなスピードでいいから、息長く継続的な支援を行なっていく。」このことを合言葉にこれからの活動を考えていく必要がある。また、震災の風化も大きな問題である。我々が行った活動の報告も含め、被災地の正しい状況を伝える必要もある。伝える活動を通して、震災を教訓とした防災のあり方や地域コミュニティの大切さなどを伝える機会ともしたい。

被災地でのボランティア活動の経験はもちろん、熱い志を持ったたくさんの仲間との出会いや事業を進めていくためのノウハウなど、若い多感な時期に素晴らしい経験ができるのが、ワカモノヂカラプロジェクトである。

震災前と震災後といった言葉が使われるようになり、歴史に残る時代の変化が訪れている。幕末や戦後といった時代の変貌期に活躍した若者たちと同様、ワカモノのチカラが求められているように思う。求められていると言うより、必要とされているといったほうが自然だ。本当に大きなエネルギーとパワー、そして発想力を持っている。我々大人に必要なのは、そんなワカモノたちに「きっかけ」と「機会」を与えることなのではないだろうか。そして、ワカモノは「挑戦」するという心構えが必要である。不安であるだろうが、安心する情報もある。1000 年に一度の未曾有の大災害であり、支援の形に正解や不正解などないということである。

【お問合せ先】
NPO 法人 生涯学習サポート兵庫
〒672-8088
兵庫県姫路市飾磨区英賀西町 2-15-2
Tel 079-230-0661　Fax 079-230-0662